

ドイツ語構造把握の諸相

—学習の現場ノート— (5) 前編

Aspekte des Begreifens von der Struktur der deutschen Sprache - Anmerkungen an Orten des Lernens - (5) erster Teil

宮 永 義 夫
Yoshio MIYANAGA

1. 語の構成

先行する『ドイツ語構造把握の諸相 —学習の現場ノート— (4)』¹⁾ (以下『(4)』とする)において、女性と複数の代名詞の共通性は、名詞の形式の共通性の反映であることを述べた。指示の原点は中性のSである。中性はすなわち無性であって、あくまでも理念上のことではあるが、有性が分かれたとき、中性と形式上区別がなく、すなわち短い形であって、意味的には活動体のようなものが男性となり、複雑な形を持ち、すなわち長く、接尾辞などを備えて、意味的には活動の源、あるいは状態を表すものが女性となる。指示詞系はSが後へ母音、理念的には-eを伴って拡張したseのようなものが、実質化してsieになっている。

名詞の複数語尾として使われる -e、-er、-(e)n、-s は、いずれも複数形構成専門接尾辞というわけではなく、言わば、名詞にも限らない語形成接尾辞である。音としては前後の順序があり、r-l-m/n-s となる。m/n については、bewillkommen のように m が先行することが専らであるが、母音のサポートを必要とする。この順序が階層ようになって、中性のSは、後方に -e を延ばして女性と複数になる。男性はSがRに置き換わっている。目的格の代表はNだと考えられる。いわゆる弱変化は主格と目的格を大きく二分する形式である。本来、活動体である有性が主語になり、その活動の産物が無性即ち中性であって、中性は目的語なのである。ところが名詞的強変化は1格と4格がごとく融合してしまい、区別がないことになった。残るのは男性の名詞弱変化のみである。これが代名詞変化へも影響し、結局、4格目的語が1格と異なるのは男性だけとなった。

女性名詞、複数名詞の共通する形式は、本来接辞を伴う複合的構造にある。この場合の格変化は、接尾辞のある語の複数形語尾の可能性から理解されるように、-nに限られる。このN式とは、すなわち弱変化である。弱変化とは主格と目的格を二分するものであった。ところが、主格と目的格が融合してしまえば、全く変化がなくなる。格変化は代名詞変化に委ねられることになった。斜格、特に付加語の性質を持つ2格を区別したい。女性名詞では、この時に語根側のSがRに転換されるのである。冠詞類+名詞の構造では、2格と3格を区別するすべはないが、代名詞変化においては、2格を際立たせるために、ihrerのようにRを重ねる(Rr)か、derenのようにNを付加する(Rn)。

複数と女性を分かちものは何か。3格において、女性はR、複数にはN式である。複数の場合も女性と同じく斜格に対してRへの転換が見られる。しかし先に見たように、接尾辞の更に後に付きうる複数語尾はNである。典型的な女性名詞であるRoseはRos-の後へ曖昧母音をもって拡張し、Ros-eになっている。Roseを語幹とすれば、更に拡張し得る接尾辞は-nであり、Rosenとなる。弱変化は言わばRoseを主格とし、Rosenを目的格とするものである。男性名詞にはJunge/Jungenのような例が見ら

れる。名詞変化では男性のみに弱変化が残っているために、目的格の本体である4格が1格から区別される。男性名詞化にS→Rが起こっているが、S→SeとなってSが残った女性名詞は、第2段階の格変化においてS→Rが起こった。ところが複数形は、唯一可能である-nが付いて、単数→複数から言えば、Rose→Rose-nであるが、Ros-を仮に語根と呼べば、複数形の接尾辞の拡張とはRos-nでもある。実体が-enであるのは、発音を可能にするため、口調のeが挿入されているからである。対応する冠詞等の代名詞変化には、女性名詞、複数名詞共に、本源的に接尾辞を伴って複合的構造を持っていることが反映して、Se型になっているのである。複数においても、目的格の本体である4格は1格と融合している。理想的には、複数形を単数形と弁別するのは弱変化のNである。複数には元来Nが含まれているという発想をすることが出来る。

繰り返しになるが、女性名詞の場合は主格と目的格を区別するために、代名詞変化においてS→Rの変換が起こった。1格と4格は融合しているから、2・3格においてR化する。2格を更に分けるためにRを重ねてRrにしたり、Rnにすることも行われる。残された3格はそのままである。複数の場合は理想的に、1・4格においても複数としてのNが含まれていて、Se(N)と捉えられる。斜格を分ける時に直接S→Rになる必要がない。Nが顕在化するのである。名詞変化においても、N変化以外として実現している複数形も音韻の許す限り-nが付加される。最も固有性を求める2格に至って初めてR化が起こるのである。

複数2格は、単独で引き受ける代名詞変化においてこそRr、Rnとなるが、冠詞+名詞においては、名詞側にN=複数形の要素があるため、当初からR(N)であって、単純なR、すなわち女性3格とは区別される。複数3格がNを重ねてNnになるのは、男性4格の単純Nと区別するためであろう。同様に、男中性2格も、中性1・4格の単純Sとの区別のために、本来的にSsと重複しているのであるが、単独の代名詞変化の場合は母音のサポートを受けてSn型になっており、その実現形がdesseとseinである。

2. 複合構造と単音節語

今まで、分かりやすい名詞・代名詞構造について見てきた。例えば、単純構造の男性/中性名詞対複合構造の女性/複数名詞といったように、構造の相違が品詞というカテゴリーの下位区分を形作っている。大づかみに語彙を捉えようとするとき、根幹部分と付加的部分の区別が重要である。理念、手法によって、捉えられるものは様々であるが、一般的に語根あるいは語幹と接辞という分け方になる。前項では簡単に、複数形の語尾と称して、-e、-er、-(e)n、-sとしたが、音構造からみれば、曖昧母音から始まる何らかの要素を措定することは当然ではない。例えば『(4)』で見たように、Tageは音節としてはTa-geであるが、要素から言えばTag-eである。Tag-eを抽出できるのは、無論、TageがTagの複数形だからである。ところがプロセスは一挙には進行しない。確かにTagに-eが付加されれば複数であることは理解される。しかしそれだけではなく、他に多数の語が-eが付加されて複数形になることがあって初めて-eが複数形の接尾辞として認知される。単数/複数という意味、ないしは機能そのものは、目に見えるかたちで捉えることができない。単数形と複数形は別の語であって、他の意味だとも言える。ただ、Tagは何かあるXの単数形であり、Tageは何かあるXの複数形であるという形式は認められる。抽象的な見えないXを媒介にしなければ、単数/複数形は認識できない。

このXを媒介にして、複数形の中に単数形+eが多く含まれることが理解されて初めて、-eは複数形を作る接尾辞(形態素)として認められるのである。一方、女性名詞を作ると簡単に説明されうる

-ung は、そのようには把握できない。例えば Achtung は achten の (女性) 名詞形と捉えることは正しく、通念上、何の問題も生じないが、はたして、Achtung と achten はどのように繋がっていると言えるであろうか。動詞 achten は人称変化等 (活用) をするので、比較的容易に achten と achte, achtest, achtet は関連づけられる。それでも、これは現在形の変化であるから、X を媒介として、例えば過去形と対比されて現在形であることが認識されたとした上で成立する。そこでようやく -n が (不定詞の) 接尾辞として存在しうるのではないか程度のこと分かる。ここまででは achten は achte-n という要素からできていることになる。Achtung とは非常によく似た綴り (音) でできていることは分かるが、まだ遠く隔たっている。

これはいわゆる口調上の e を含む例で、意図的に複雑化したきらいはあるが、単に名詞形／動詞形と言っても何をもって関連すると言うのかは難しい問題である。仮に不定詞語尾 -en まで行き着いたとしよう。そうすれば、語幹部分は共通の a(A)cht である。自立した形態素として存在しうることの証拠である単音節語の acht, Acht もある。だから acht-en, Acht-ung であるとはならない。Achtung の標準の分綴は Ach-tung であり、従って最も一般的な音節も Ach-tung である。しかし音節の可能性は、制約を無視すれば、音素に従って、A-achtung, Ach-tung, Acht-ung の 3 種あり得る。この内、A-achtung は、本来の発音であれば、ここでは cht は [xt] と発音されることになっている。まれに [çt] はあるが、音節頭では原理的に [xt] はない。一方、Acht-ung は音節で切ろうとすると、-ung は u の前に声門閉鎖を必要とする。従ってここでは切れない。ということは Ach-tung しかない。それにもかかわらず、-ung を接尾辞とする根拠を求めるとすれば、意味に依拠するしかない。素朴に観察すれば、明らかに意味で繋がっているように見える。しかし「意味」はいわば連続体であって、分節することは難しく、同じような意味であっても等しいとは言えず、遠く隔たって見える意味であっても関連がないとは言い切れない。Maulwurf 「もぐら」の Maul は中高ドイツ語の mu 「土塊」であって、現行の Maul 「口」とは違うが、通時的に語源などを探索しなければ区別は付かない。「もぐら」の Maul- も今は音韻として「口」に繋がっているとも言えるのである。-ung について分かることは、音節の切れ目がどうであれ、-ung に終わる語は女性名詞であることが非常に多い、ということなのである。-ung を接尾辞として認めることは厳密にはできないが、傾向として間違いではないから、実質上、接尾辞として便利に使うほうがよいのである。

このように非常に困難ではあるが、自立した acht という語根なり語幹なりと呼べる形態素があり、-ung が接尾辞であるという確証が、語彙の構造把握の前提である。語幹と接辞との切れ目は、音韻上の可能性から言えば、いわゆる口の開きによって、一応の塊は想定できる。破裂音<摩擦音<鳴音<母音>鳴音>摩擦音>破裂音<摩擦音が一音節である。鳴音は前後いずれかに直接母音に繋がる必要があるから、音節末に鳴音が来ることはない。これが切れ目の大きな指標である。しかし母音と母音の間の切れ目を確定するのは、他の要素を見なければ困難である。接辞には強勢はないはずである。従って、語幹ないし語根は必ず 1 音節である。そこで実際に存在している単音節語が重要な役割を果たす。

日用に供される独和辞典の中で、質量共に評価の高い小学館『独和大辞典』から、一音節語を抽出した²⁾。全てを網羅する余裕がないため、サンプルによって試行した。アルファベット順の辞書からの抽出には、素朴に、当初からグループをなす、語頭文字を同じくする語を 1 セットにするのが簡単である。なるべく無作為の抽出が望ましいが、アルファベットはそれぞれが特性があり、平均値のようなものは容易には求められない。そこで、例えば基本的なアルファベット 26 文字の中間を取れば、13 番目、14 番目は M と N である。ところが、M、N は鳴音、更に鼻音であることまで共通している。図

らずも、特殊な傾向を帯びる。辞書のページ数の中央を取ると、『独和大辞典』では全ページ数 2823 ページで、中央は p.1412、Lehr-Lehrmethode。『アクセス独和辞典』の場合、全ページ数 1631、中央は p.816、LH~Lichtgeschwindigkeit。『新アポロン独和辞典』では、全ページ数 1700、中間は p.850-p.851、Liquidität~Lira になる。いずれも L の中に来る。鳴音である L は綴りとして発音される場合は後に直接母音を要求するから E と I の間の F、G、H は略語に用いられる他はなく、E と I はさほど離れてはいない。

語頭字を 2 つ分取り扱うこととして、後続する M を採用すると同じ鳴音であり、傾向が片寄る。そこで、前へ遡って、K を併せ考える。K は無声の破裂音であり、鳴音である L とは性質として最も離れている。この 2 つを並べれば、ある程度、一般的と言えるであろう。

辞書の見出し語から一音節語を抽出する際の問題は、活用しない、いわゆる不変化詞であればよいが、動詞のような活用変化するものは、一部の特殊な変化形を除いては、一音節形が見出しにならないことが多い。一般的に、接頭辞がなく、語幹が一音節である動詞は、語幹が即ち 2 人称単数の命令形であるから、自立した一音節語に加えるべきである。実質的に -e が加わり、命令形が 1 音節にはならない動詞の判別には、やむを得ず文法的公式を使っている。変化上、口調の e を必要とする動詞の内、語幹が -d、-t で終わるものは、-e の付加がなくとも発音は可能であり、一音節になり得る。語幹末尾が -m、-n であって、その前が l、r でなければ口調の e を必要とする。これは一音節にならない。下に掲げた一覧では、基本的に辞書の掲載順になっている。同じ綴りであれば小文字のものが先に来る。ところがここで、例えば kauf が Kauf の後に来ているのは実際は kaufen だからである。同様に綴りの順序が逆転している場合もある。これも多くは動詞の語尾を除いたからである。

動詞は語幹だけを挙げてあるが、一音節となるのは命令形だけではない。kommen を例にとれば、komm の他に、kommst、kommt もある。これらは一律に表記しなかった。用法に踏み込むからである。非人称動詞であれば、-st はないはずである。また、命令形になり得るかどうかの問題もある。もし用法が許すのであれば、動詞は語幹のみ、-st、-t という形を取り得る。動詞については、材料として一音節語をなし得るという意味で挙げてある。従って実際には更に増加する。

形容詞においても、-st が付く最上級は一般に一音節語に加わるが、ウムラウトが付加される主要なものを除いて、見出し語には掲出されていない。それらも挙げていない。

Kaag, kaak, kack, Kaff, kahl, Kahm, Kahn, Kai, Kain, Kak, Kalb, kalb, Kalk, kalk, kälk, kalt, kält, kam, Kamm, kämm, Kamp, Kampf, kämpf, kann, Kant, kant, Kap, kapp, karg, kärgst, Karl, Karn, karr, Karst, kart, Kasch, Käsch, kasch, kau, Kauf, kauf, kaum, Kausch, Kautsch, Kauz, Keats, keck, Kees, kehl,kehr, kehrt, keif, Keil, keil, Keim, keim, kein, Keks, Kelch, Kelt, Kempff, kenn, Kerb, Kerf, Kerl, Kern, kern, kess, Ketsch, ketsch, keuch, keusch, Khan, Kib, Kick, kick, Kicks, Kid, Kiek, kiek, kieks, Kiel, Kien, Kies, kies, Kiez, Kif, kiff, kill, Kiln, Kilt, Kimm, Kind, *Kindl, King, Kink, Kinn, Kipf, kipp, Kips, kirm, kirr, Kirsch, Kitsch, Kitt, kitt, Kitz, klack, Klack, klacks, Klacks, klaff, kläff, klag, klamm, Klamm, Klan, klang, Klang, Klafp, kläpf, klapp, klaps, Klaps, klar, Klar, klär, Klas, klatsch, Klatsch, klau, klaub, Klaus, kleb, kleck, Klecks, klecks, Klee, Klei, kleib, Kleid, kleid, klein, Klein, Kleist, klemm, kleng, klick, Klick, klieb, klier, Klietsch, kliff, Kliff, klimm, Klimt, kling, klipp, Klipp, Klips, klirr, klitsch, Klitsch, Klo, klob, klöhn, klomm, Klon, klon, klön, Kloot, klopf, klopp, Klops, Klöß,

Kloth, Klotz, klotz, Klub, kluck, Kluff, klüft, klug, klügst, Klump, klump, Klus, Klut, knaatsch, knack, Knack, knacks, Knall, knall, knapp, knaps, knarr, knarz, Knast, Knauf, Knaul, knäul, knautsch, Knecht, knecht, Knef, Kneif, kneif, Kneip, Kneipp, kneipp, kneist, knet, Knick, knick, knicks, Knicks, Knie, knie, Knies, knietsch, kniff, Kniff, Knilch, knill, knipp, knips, Knips, Knirps, knirsch, knitsch, knitz, Knopf, knöpf, Knopp, Knorz, knorz, knot, Knuff, knuff, Knülch, knüll, knüpf, knurr, Knust, Knut, knut, knutsch, Kob, Koch, koch, *Kode, Kog, Kohl, kohl, kok, Koks, kolb, Kolk, kolk, Köln, Kölsch, Köm, komm, könn, Koog, Kopf, kopf, köpf, Kops, Korb, Kord, kör, Kork, kork, Korn, körn, *Korps, kos, Kost, kost, Kot, kotz, Kraal, krach, Krach, krächz, Krad, Kraft, kraft, Kräh, kräh, Kral, krall, Kram, kram, kramm, Krampf, krampf, Kran, kran, krank, kränk, kränkst, Kranz, kränz, Krapp, krass, Kratz, kratz, krau, Kraul, kraul, kraus, Kraus, kraus, Kraut, Krebs, krebs, Kreis, kreisch, kreis, kreiß, krell, Krem, *Kreml, Kren, kreng, Krepp, krepp, kress, Kress, kreuch, Kreuz, kreuz, krieche, Krieg, krieg, Kriek, Kries, Krill, Krim, krimp, Kring, kripp, Krips, Kris, krisch, kroll, krön, Kropf, kröpf, krös, kross, krud, Krug, krumm, krümm, krumpf, Krupp, krütsch, Krux, Kuff, Kuh, kühl, kühn, Kül, Kulm, Kult, Kumm, Kump, Kumpf, Kumst, Kumt, kund, Kunst, Kunz, kupp, Kur, Kür, kur, kür, kürm, kurr, Kurs, Kürsch, kurv, kurz, kürz, kusch, Kuss, küss, kutsch, kutt, Kux, Kwass,

la, lab, lach, Lachs, Lack, lack, lad, lädst, lädt, lag, lahm, Lahn, Lai, Laib, Laich, Lamm, Land, land, länd, lang, läng, längs, längst, Langue, Lapp, läpp, Lar, *large, Lärm, las, lasch, lass, lässt, last, Last, Latsch, latsch, Latz, lau, Laub, Lauch, Lauf, lauf, läufst, läuft, Laum, Laus, lausch, laus, laut, *Lear, leas, leb, Lech, lechz, leck, Leck, Lee, leeg, leer, leg, Lehm, Lehn, lehn, Lehr, lehr, Lei, Leib, leib, Leich, leicht, Leid, Leig, leih, Leik, Leim, leim, Lein, lein, leis, Leis, leist, leit, Lek, lenk, lenz, Lenz, lern, les, les, letz, letzt, Leu, leucht, Lew, Lex, Lic., licht, Licht, Lid, lieb, Lieb, liebste, lieg, lieh, Liek, lies, Liesch, *Liesl, ließ, liest, Lift, lind, Ling, link, links, Linz, lisch, lischst, lischt, List, Liszt, litt, live, *Livre, Lloyd, Lob, Lob, lobb, lob, Loch, loch, lock, löck, Lodz, Lotsch, log, log, Log, loh, Loh, Lohn, lohn, löhn, Lok, Lolch, Look, Lorch, Lord, Lork, los, Los, losch, lös, lösch, lös, Lost, Lot, lot, löt, lots, Lounge, Lourdes, Loure, *Louvre, Luch, Luchs, Lucht, Lücht, lücht, lud, Luft, luft, lüft, Lug, lug, lüg, Lump, lump, Lunch, Lund, Lünk, Lünt, lunz, Lupf, Lurch, Lust, lüst, lütt, Lutz, Luv, luv, Lux, lynch,

以下に掲げるのは単音節語に限らない K 項に見られる語頭綴りを母音字の登場まで表記したものである。

ka, kä, kai, kau, kea, ke, kee, kei, keu, kha, khme, ki, kie, kla, klau, kläu, kle, klei, kli, klo, klö, klu, klü, kly, knaa, kna, knäu, knau, kne, knei, kni, knie, kno, knö, *know, knu, knü, ko, kö, kra, Krä, krau, Kräu, kre, krei, kreu, kri, krie, kro, krö, kru, krü, kry, ksa, kte, ku, kü, kwa, ky,

今回は前編としてリストを掲出するところまでとした。註も後編にまとめて掲出する。